

新しい教科書の行方

この春、いよいよ新しい教科書が完成します。
昭和二十七（一九五二）年、光村図書が初めて中学校国語教科書を刊行して以来、今回が二十二回目の改訂となります。
今を生きる生徒にとって、教科書はどうあればいいのか、どんな「国語」の力を身につければいいのか。
本特集では、編集委員の先生方のお話やデジタル教科書を活用した授業レポートなどを通して、これから求められる教科書の在り方について探っていききたいと思います。

対談

これからの
時代を担う
子どもたちに

編集委員の先生方がどのような思いを込めて
新しい教科書を編集されたのか、
その一端をお話いただきました。

高木まさき

横浜国立大学教授

宗我部義則

お茶の水女子大学附属中学校教諭

聞き手 光村図書中学校国語編集部

「主体的な学び」とは何か

——新しい教科書の方向性について考えるにあたり、今、国語の授業で何が課題となっているのかを伺いたいと思います。

高木 学校などの研究テーマとして、よく「主体的な学び」ということが挙げられています。学習指導要領にも頻出するキーワードです。「言語活動」と並んで関心の高いテーマではないでしょうか。また、知識基盤型社会といわれるこれからの時代には「情報活用力」も課題となっています。

宗我部 学力についての議論の中では、「語彙力」「小・中九年間の学びの系統性」も

重要な課題として挙げられますね。

——まず、「主体的な学び」とはどのようなものだと捉えればよいでしょうか。

高木 「主体的」というのは、「自発的」とか「自分勝手」とは異なります。対象を客観的に見つめ、いくつかの選択肢の中から、自分なりの根拠をもち、どれか一つを選び取っていくことなのです。ただ好きだから



撮影・鈴木俊介



たかぎ
高木まさき

1958年静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）、「合科的・総合的な学習のための読書関連単元100のプラン集」（共編著 東洋館出版社）など。光村図書小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。

中学校国語での 言語活動とは

——選択のプロセスを身につけるうえで、言語活動はどのような意味をもつてきますか。

宗我部 言語活動を取り入れることで、ゴールが見えやすくなることはあります。どういう達成があればよいのか、生徒にも教師にも見えますから。例えば、文章を読んで理解するというゴールは、生徒にはイメージしにくい。それが「視点を変えて書き換える」とか、「朗読で読んだことを表現する」というゴールなら、生徒にも見えるはずです。

高木 ただ、小学校と違って、中学校では大きな単元を組んで言語活動をたくさんやらせる時間はありません。限られた時間で、言語活動を通して効果的に試行錯誤と選択をさせることが大事になってきます。言語活動は、そこを踏まえて考えていかなければなりません。

宗我部 本来、国語科は、ずっと言語活動を通して行ってきたものであり、いろいろな取り入れ方ができるはずですね。

中で、自分の学びをメタ認知したり物事を見つめる力が養われたりしていくのですね。

宗我部 ええ。ゴールが見えれば、何が達成されればよいかわけではなく、それを達成するためにどんな手立てがあつて、どれを選んだらよいかわという意識も芽生えてくるのではないかと思います。それを途中段階の目標にするんです。

例えば、ブックトークだと、ある本を紹介するというゴールに向かう途中で、どうすれば相手に興味をもってもらえるか、そのためにはどんな工夫ができるかなどを考える。それが途中段階の目標になり、見通しをもった主体的な学習につながっていくのではないでしょう。

高木 そうした途中での試行錯誤と、その中で選択のプロセスを身につけていくことが、主体的な学びにつながるんですね。

で示されれば、先生方も主体的な選択ができます。

国語科における 情報活用力とは

——次に、情報活用力についてのお話を伺いたいと思います。国語の学習の中で、この力を身につけるためにはどのような工夫が考えられるでしょうか。

宗我部 現場の先生が「情報活用力」と聞いたときのイメージは、ICT（※1）に関することや、調べ学習のことではないでしょうか。

高木 そうですね。確かにICTの活用は情報活用力と密接に関係していて大切なこ

とです。しかし、パソコンの操作自体に魅力を感じてしまい、肝心の学習が深まっていない生徒もいます。国語科としてICTを活用した授業をする際には、先生は、生徒が何を楽しんでいるのかをよく見極めて、国語の力につながるような指導をしていかなければなりません。

宗我部 国語科としての情報活用力をしっかりと考えていきたいですね。

高木 情報活用は、まずはテキストを読む活動の中でも十分にできるんです。最も縁遠いと思われがちな物語や小説も、実は情報として学ぶことができます。例えば、「少年の日の思い出」（二年）は、「僕」という一方向の視点から語られている。だからエーメールが悪いやつのように見える。しかし、これをエーメールの視点から捉え直したら、別の事実が見えてきます。そうし

高木 無理にでも言語活動を行わなければ、と先生方が考えてしまつては本末転倒です。言語活動はあくまで例であり、思考力、判断力、表現力を育てるためのものです。それを見失わないためには、先生自身に選択する力が求められます。

宗我部 そうですね。この指導事項にはこの言語活動をとというパッケージ化された授業を行つてしまうと、先生方もゴールを見失つてしまいます。先生も主体的に考えなくてはならないと思います。

——特に、読むことの領域においては、適切な言語活動を選択することは難しいですね。教科書の「学習の手引き」で、うまく示していくことはできるでしょうか。

高木 分析的に読むだけの授業にならないように、その文章を読むための動機づけ、意識づけになるような呼びかけの形で、言語活動を示していくのは有効ではないでしょうか。

宗我部 手引きで「何のために読むのか」という呼びかけが入れば、生徒の読み方にこれまでと違う必然性が生まれてくるはずです。また、決められたパッケージのような形ではなく、呼びかけというソフトな形



そが よしのり
宗我部義則

1962年埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題（中学校国語）」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。光村図書中学校「国語」教科書編集委員を務める。

※1 ICT (Information and Communication Technology) コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報コミュニケーション技術。

生きた場面でたくさん言葉と出会えるような教科書を。

高木

た学習が、日々の新聞やテレビのニュース番組を見るときにも生きてくるのです。

宗我部 同感です。文学で、語り手がどんな視点で物語っているかを考えることこそ、メディアリテラシーと直結しているように思います。

説明文の要約も情報活用の視点で考えることができます。従来の指導では、いかに簡潔にまとめるかに重点が置かれてきましたが、どのような目的で、どのような相手に向かって要約をするかということは、まさに情報発信力と直結しています。国語科における情報活用力の根幹となる重要な部分ですね。

——誰に対して、どういう目的で要約するかというお話がありました。情報の集め方についても、これらを意識した集め方があるでしょうか。

宗我部 教科書の中に情報の集め方が網羅されている必要はないと思います。ただ、相手や目的によって、こういった情報を集

めてくるかを学ぶことは重要です。

最近の生徒は、調べ方そのものを知らないことが多いように感じます。図書館に行けば何かある、という当たりはつけられても、レファレンスサービスで司書に聞くことは意外とできない。調べ方を網羅的に知るのではなく、いくつかの情報収集法を複合し、生徒自らが状況によって使い分けられる力をつけることが大事ですね。

高木 情報を集める力と、集めた情報を吟味する力、目的と相手を考えながら発信する力。こういう力を三年間で身につけていくことが必要です。情報活用もまた主体的な学びといえますね。

——情報発信は、今後生徒が生きていく社会を考えると、避けて通れないことではないでしょうか。

宗我部 情報発信は、情報モラルの側面がクロージアアップされることが多いですね。ソーシャルメディアを巡る問題があるのも確かですが、先生方自身がLINEをはじめ

ように、単純に語彙集や一覧表を教科書に載せるだけでは意味がないことは、先生方も痛感されていると思います。大切なのは、生きた場面の中でどれだけ皆さんの言葉と出会うかです。言語活動の中で、言葉に出会うこと、出会う場面をどれだけ多く作るかですね。

読書活動はもちろんです。新聞、ニュースなどを見たとき、よく意味がわからなくても、気になる言葉を増やしていくことが重要です。例えば、日頃から気になる言葉をメモする習慣をつけるだけでもいいんです。意味まで調べるとなるとハードルが高くなってしまいますが、言葉を集めるだけなら続けられるはずです。

教科書では、生徒が気になる言葉を増やしたり、似た言葉の違いを考えたり、言葉に対するアンテナを常に日常の中に張り巡らせる姿勢を育む工夫を取り入れたいと思います。

——単純に語彙のカタログを渡せば語彙力がつくということではないですね。

語彙が増えると、
認識のしかたが多様になります。

新しい
教科書の
行方

宗我部

宗我部 そのとおりです。私は「言葉の宝箱ノート」(下写真)といって、目に留まった言葉をいつでもメモできるように、メモ帳を持ち歩く習慣をつけるよう指導しています。そして、毎日の国語の時間の最初に交代で一人ずつ発表させる実践を続けています。

高木 私が語彙獲得について図式化した「富士山モデル」(下図)というものがあります。正確に使える言葉は、富士山のとっぺんのごくわずかな白い部分でしかありませんが、裾野の広がりがある皆さんの言葉がそれを支えているのです。

宗我部 ちょうど、赤ちゃんが親の言葉をひたすらため込んで、いつのまにか使えるようになっていくのと同じように、中学生の頃は、社会的な言葉をどんどんため込んでいく時期なのですね。言葉と出会う、つまり語彙が増えるということは、認識のしかたや相手の言葉の受け止め方が多様になることだと思います。

いっぽう、語彙力の問題として取り上げられる一例として、生徒が決まり切った表

めとするSNS(※2)などをよく知らなかったため、過剰に危険視している面があるのかもしれませんが。危険性はきちんと踏まえながらも、有効な側面についても教科書で扱い、上手な付き合い方を教えることは必要でしょうね。

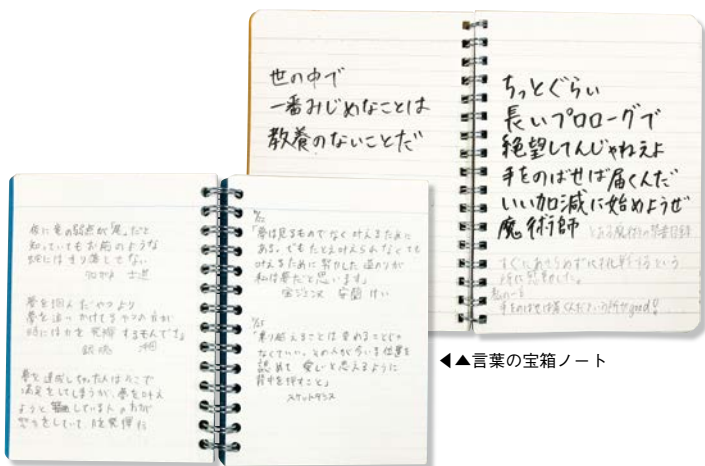
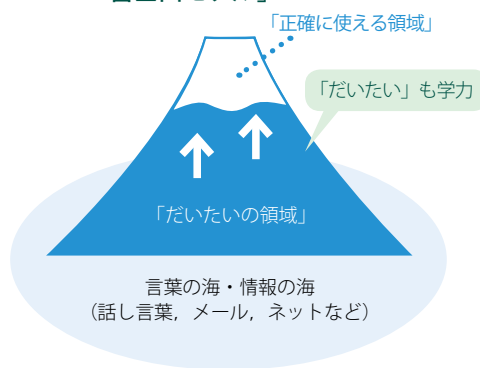
高木 私もどちらかというと、危険性を先に考えてしまいます。しかし、東日本大震災の際には、マスメディア以外の個人が発信した情報がクロージアアップされました。そうした情報が、多くの人の命を救ったという事実もあるのです(※3)。新しいメディアが増えていく中で、危険な面だけでなく、よい面も取り上げることが必要だと思います。

語彙力は どのように育てるか

——現場の先生方からお話を伺うと、語彙力をつけていくことの大切さが必ず話題になります。教科書ではどのように対応しているのでしょうか。

高木 語彙力の重要性は前々から課題として挙がっていましたが、英語の単語集の

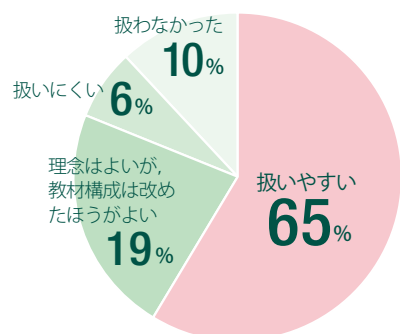
言葉の獲得過程の 「富士山モデル」



◀言葉の宝箱ノート

※2 SNS(Social Networking Service) 特定の目的や関心をもった人どうしが情報交換を行うことができるインターネット上のサービス。
※3 そうした情報が…… 東日本大震災の発生直後に、中学生がテレビのニュースを携帯電話で撮影し、動画サイトで中継した(テレビ局が特別に許可)。この中継によって、テレビやラジオが使えなかった被災地の人々に情報を提供することができた。

■1年「言葉に出会うために」は、扱いやすいでしょうか。



「平成24年度版 中学校国語に関するアンケート」
(光村図書)より (回答者数 668名)



高木 例えば、「ごんぎつね」(小学校四年)など、小学校で扱った教材を中学校の授業に取り入れる先生もいらっしゃいますね。中学生になって読むと、過去の学びそのものを相対化しながら、高めたり深めたりできるからです。

——具体的にはどういった指導ができるでしょう。

し、生徒に見通しをもたせて学習させるなら、中学校の先生も小学校での学びを意識する必要があります。生徒が何を知っている、どのような学び方をしてきたのか、知っておくべきでしょう。

高木 もちろん語彙が豊かで、いろいろな言い換えができるほうがいいのですが、文化状況、社会状況から生まれた若者言葉でしか言えない気持ちや感覚もあると思います。先生方は、そういうことも理解してあ

——語彙力というのは、言葉の数を増やすだけではないということですね。

高木 説明文教材「君は『最後の晩餐』を知っているか」(二年)の中で、筆者は「かっこいい」という言葉を印象的に使っています。それがどんな意味で使われているのかを考えさせるのが、この教材を指導するポイントの一つでしょう。生徒が発した「すごい」という言葉も、どういう文脈でどう使用されているか、その生徒自身やクラス仲間、気づかせていくことが国語の指導の大事なことですね。

現しか使わないことが挙げられます。感動したときや驚いたときに、「すごい」としか言わない。ですが、その子は、「すごい」という言葉に万感の思いを込めて使っていることもあります。聞き手が、その「すごい」から、いろいろな意味を想像できる語彙をもっているからこそが語彙力ではないでしょうか。



げてほしいですね。

さらに、全国学力・学習状況調査の結果を見ても、「語彙力が落ちた」という結果はありません。和語が弱い傾向は見られても、調査でわかるレベルでは、今の生徒の語彙力は昔に比べて決して劣ってはいないのです。もし語彙が減っていると感じるなら、どういう言葉なのか、どういう状況で低下を感じるのかを冷静に考える必要があるのではないのでしょうか。

宗我部 私も、本当に語彙力が低下しているのか疑問です。大人が使っている言葉を中学生が使おうとしても、実生活の裏づけや経験が伴わず、実感のこもった言葉になりません。言葉として知っていても、使う

宗我部 そうですね。私も、小学校二年で学習する「お手紙」を中学一年生に改めて読ませたことがあります。すると、小学校のときには気がつかなかった新しい発見がたくさんあった。生徒自身も、自分の読む力がいかに伸びたかを実感したはずで、そんな授業を通して、生徒が成長を感じ、意欲を高められるようなスタートが切れるといいですね。

高木 小・中連携と聞くと、スムーズにつなげてギャップを減らすことばかり考えがちですが、中学生としてのハードルを上げて、意欲を高める、学習に自覚をもたせる、誇りをもたせることも大事ですね。

宗我部 私の学校では、伝統的に幼・小連

気になれない。生徒に足りていないのは語彙ではなく、生活経験なんです。

語彙を増やすことは、自分の生活経験に改めて光を当て直し、耕し直すような側面があると思います。そうすることで生徒なりに実感を持ち、使えるようになっていくのではないのでしょうか。

高木 自分の身の丈に合った、実感のこもった言葉を使い、表現できるからこそが、本当の言葉の力ですね。量も大事ですが、ただ単に知識として使えるだけでは本当の力になっていないと思います。教科書では、そういうことも踏まえ、生活経験と結び付けた語彙学習ができるように心がけたいと思います。

小・中の連携で大切なこと

——学習指導要領では、小・中九年間の学びが重視されています。小・中の連携において、教科書ではどのような工夫ができるのでしょうか。

高木 今まで中学校においては、生徒が小学校で何を学んだかは、あまり問われてきませんでした。しかし、学習の継続を重視

携、小・中連携を重視してきました。その視点から考えると、小学校から中学校への授業のギャップをなくすことと、生徒が成長を実感できるよう、あえて設けるハードルの両方が必要だと思います。

例えば、中学一年冒頭の「言葉に出会うために」には「野原はうたう」が掲載されています。これは小学校四年でも学習している教材です。単純に、小学校で習っているから生徒が入りやすいというのではなく、小学校のときにはどんな読み方をしたのかという、これまでの学習を振り返る意味で必要な教材だと感じています。その後、ノートを取り方、図書館の使い方、調べ学習のしかたなど、中学校での学習の進め方が具体的に教材として載っている、ステップアップを実感できるようにしています。

高木 アンケート結果(上図)を見てもかなり評価が高い教材です。新版でも、小学校からの継続性と、あえて設けるハードルの両方を考え、よい意味でのプライドをもたせる工夫をしたいと思います。

これからの時代を担う子どもたちに読ませたい教材とは

——これからの社会の中で生きていく生徒に、どういった教材と出会わせていけばいいでしょうか。

高木 私は、大きく分けて二つあると考えています。

一つは、言葉を見つめる教材です。これからの時代は、何が正解か見えず、すぐに答えが出せるような時代ではなくなっていくのではないのでしょうか。また、一つの答えを出しても、すぐにそれを変更しなければならなくなるような時代になるかもしれません。だからこそ、さまざまなことにアンテナを張り、学び続け、考え続けることが必要になってきます。

常に情報を更新し続けていかなければならないときに必要なのは、やはり言葉です。常に言葉を見つめて吟味していくことで、自分を見失わず、人生を切り開いていくことができます。

宗我部 「言葉に対する感受性」や「言葉の力」がキーワードとなりますね。

生徒の生き方の指針となるような教材と出会わせたい。

宗我部

ない時代を迎えようとしています。

宗我部 私も現場に立つ教師の一人として、生徒が自分のモデルになるような生き方を必死に探しているのを肌で感じます。先が見えない時代だけに、自分の生き方の指針になるような人を一生懸命探しているように思いますね。だから、国語の教材の中で、さまざまな生き方に触れることができる作品に、できるだけたくさん出会わせたいです。

——現場の先生方を対象にしたアンケート結果（P13表）でも、生徒に読ませたい教材として伝記やルポルタージュが上位に挙がっています。

宗我部 私は、手が届かないような偉人の伝記ではなく、同じ伝記でも、置かれた状況に真摯に向き合って生きる身近な人々の話に触れさせたいと思います。他には、戦争の中に生きる子どもたちなど、広い世の中で自分を対象化できるような作品もあるとよいですね。自分の日常の中にはない世

価値を創造できる思考力が育つ教科書

宗我部 これからは、社会の流れに乗っていく人ではなく、流れを変えられる人が新しい時代を創っていくと思います。既存の価値や考え方にとらわれず、現状を変えていけるような思考力を育てる教材を豊富に掲載することが、教科書の使命だと考えています。

高木 教科書は生徒にとつての羅針盤であると同時に、さまざまな生き方、考え方を示して、それを選択させたり融合させたりすることができるようなものでなければなりません。できあがった価値に追従するのではなく、価値を創造していくことのできるような思考力を育てる、それが教科書のいちばん大切な役割だと考えています。

——ありがとうございます。

平成二十八年度から使用される新版教科書は、全国の先生方のご意見を踏まえ、さらにご指導しやすい教科書を目ざして編集を進めてまいりました。
新しい教科書に、ぜひご期待ください。

■説明的文章の分野・話題につきまして、特に生徒が関心をもっていると思われるもの、また、これから生徒に必要と思われるものをお選びください。（複数回答可）

1 地球環境	282	13 福祉	110
2 スポーツ	278	14 人権	101
3 情報・メディア	267	15 外国文化	96
4 日本文化	206	16 キャリア教育	89
5 宇宙	178	17 歴史	84
6 コミュニケーション	169	18 倫理・道徳	83
7 科学技術	140	19 芸術	56
8 国際関係	132	20 医学	54
9 生物	127	21 哲学	52
10 平和	126	22 政治経済	20
11 心理学	121	23 地理	12
12 言語	112	24 その他	11

その他：音楽・ファッション・アニメ・芸道・サブカルチャー・漫画・論理学・現代哲学
日常に密着したもの。
生き方のモデルとなるような文章。

「平成24年度版 中学校国語に関するアンケート」（光村図書）より

界を語ってくれる人の言葉が教科書に入ってくると、さまざまなものの見方を提示でき、正解のない時代を生き抜く力へと結び付いていくのではないのでしょうか。

——東日本大震災は、社会の方向を大きく変える出来事だったと思います。

高木 やはり、国語科としても避けて通れないことでしょう。被災地の方々の心にも配慮しつつ、震災時に私たちが何を考え、何を学んだのかを忘れないためにも、生徒に伝えていきたいと思っています。

宗我部 震災の大変さ、被害の甚大さを繰り返し伝えるというより、困難を乗り越え、工夫して現状を変えていこうと努力する人に焦点を当てた教材などに出会わせたいものです。

高木 困難が起こっても、違う発想で乗り越えていく人間の力強さを見せたいと思います。

教科書の役割は、新しい価値を創造できる思考力をつけること。

■物語や小説、詩・随筆以外で、中学生にどのような文学的な作品を読ませたいと思われますか。（複数回答可）

1 ルポルタージュ	197
2 伝記	192
3 落語	177
4 ドラマや映画などの脚本	166
5 対談	94
6 戯曲	77
7 狂言	61